様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21720257
研究課題名（和文）　唐五代期における実用典籍の読者層の研究－中国西北出土古文献を中心に
研究課題名（英文）The Study of Readership of Practical Books in Tang and Five Dynasties Era: Focused on Manuscripts Excavated from Chinese North-eastern area
研究代表者
岩本　篤志（IWAMOTO　ATSUSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・助教
研究者番号：80324002

研究成果の概要（和文）：中国の敦煌・吐魯番を中心とした西北地域からは、北朝から唐末五代期にかけての出土古文献が多数発見されており、近年も新たな報告があいついでいる。契約文書や公文書については従来から使用目的や発信者や受信者の究明がなされるのが常であったが、典籍については必ずしもそうでなく、既知のテキストとの異同が研究の焦点になってきた。本研究は主に敦煌から発見された漢文文献のうち、比較的点数が多い唐～五代初めの典籍写本の分析を行い、それを書写した者と読んだ者の階層を編年的に位置づけた。

研究成果の概要（英文）： Many Several manuscripts written in Medieval China was excavated from Chinese North-Eastern area centering on Dunhuang and Turfan. Previous studies found the several purpose of contract and official documents ,and mainly focused on comparing texts between excavated books and those handed down to nowadays.
However usage and purpose of many excavated books in historical situation has not drawn much attention. This study analysed on Practice books excavated from Dunhuang from Tang to Five dynasties era, and evaluated the class of the transcribes and the readership chronologically.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：敦煌文献　敦煌秘笈　占術　医術　童蒙書

１．研究開始当初の背景

敦煌・吐魯番を中心とした中国西北地域で発見された宋代以前の公文書・契約文書に関する先行研究ではその使用目的や発信者や受信者の究明がなされるのが常であった。しかし、同様の敦煌・吐魯番文献でも古典籍については必ずしもそうではなく、既知のテキストとの異同がその焦点となってきた。つまり、なぜ敦煌や吐魯番でどのようにそうした典籍が読まれたのか、またどのように読まれたのかという角度からの究明が十分なされていなかった。

２．研究の目的

本研究では主に敦煌から発見された漢文文献のうち、比較的点数が多い唐～五代初

めの典籍写本の分析を行い、それを書写した者と読んだ者の階層を編年的に位置づけ、それを北朝隋唐期の敦煌または内陸アジアの一都市における一様相としてあきらかにしていくことを主目的とする。

３．研究の方法

本研究は敦煌文献を実見して調査することでえられる分析にささえられている。

そのため、調書申請時には、特に質の高い敦煌文献を所蔵するとされる欧州の研究機関を重点的に調査する予定であったが、2009年３月に大阪の武田科学振興財団・杏雨書屋が700タイトルを越える敦煌文献を所蔵することをあきらかにしたことで状況は一変した。国内にいながら、いまだ研究されたことがない敦煌文献を調査できるようになったのである。しかもその中には申請者が研究課題とした唐～五代初めの典籍写本が大量に含まれていた。

そのため基本的に杏雨書屋蔵品の調査に重心をおきつつ、欧州の海外研究機関での調査を補足的におこなうことで研究活動を展開することとした。

敦煌文献は多くの場合、表裏は異なる利用がなされている。しかし、従来の研究では、その内容によって異なる研究者が扱ってきたため、料紙の利用過程の分析は不十分になりがちで、結果として典籍の年代比定が曖昧になっていたものもあった。

本研究では、これまでの敦煌学の研究成果をふまえつつ、調査対象資料の料紙の両面すなわち一次利用面と二次利用面双方の分析をとおして、書写年代および用途の比定に活かしていく手法をとった。

４．研究成果

所定の３年の期間において、本助成による成果として４本の論文・書評を公表し、学会・研究会発表を７件、おこなった。

このほか、2010年11月に本助成の成果として中国、復旦大学にて行った研究発表をもとにした中国語論文が2012年中に上海古籍出版社から刊行される書籍に収録予定である。また、2009年８月に本助成の成果として中国、武漢大学にて行った研究発表は大会時に配布された報告集に論文形式で掲載されたものの、その後日本語でも中国語でも公刊しておらず、近年中に公刊予定の単著に収録の予定である。

また、本助成によるものではないが以下に言及しているように関連業績として別途１本の単著論文を執筆、１件の研究講演をおこなっている。

以上、今後刊行予定のものや本助成外の関連業績もあわせて計上すれば本研究の期間中に実質的に７本の単著論文、８件の研究発表・講演をおこなったことになる。

以下にその概要を示す。

発見後、百年以上ほぼ秘蔵されてきたといってよい武田科学振興財団・杏雨書屋蔵敦煌文献コレクションについては、私はその公開以前にも杏雨書屋蔵品と推定されていた古写真に依拠して成果を公表してきた。そしてその公開後まもなく、いち早く実物を何点か調査をさせていただく機会を得て、本課題の成果として盛り込むことができた。

実は杏雨書屋蔵敦煌文献コレクションは、それが本物の敦煌文献かという点に疑義が提示されており、調査分析には、自ずからそのものの真偽に言及する必要性が生じる。このことは欧州等に保管される敦煌文献の多くに共通する課題であり、それをいかにして見極めるかは世界の敦煌学の関心の的であった。

では成果をひとつひとつ紹介しておこう。

本研究の成果のひとつは2010年3月に公刊した「敦煌本「霸史」再考－杏雨書屋蔵・敦煌秘笈『十六国春秋』断片考 」である。本稿では「敦煌秘笈『十六国春秋』」は史書の一部であり、実際は『十六国春秋』ではなく、すでに散佚した『三十国春秋』の可能性が高いことを論じた。この典籍は実用書ではないが、その背面は宗教的儀礼に関する内容を書写するために二次利用されたものであった。さらにそうした利用の後には補修用の故紙として放置、廃棄されたとみられる。このことはただちに敦煌文献全体の性格に直結するものではないが、敦煌文献とは必ずしも典籍として完全なものを集めた一群に由来するわけではないことを示唆するものといえる。

また、発表時期がさかのぼるが、2009年８月に湖北省武漢市で開催された「第三届中国中古史青年学者聯誼会」においては、フランス国立図書館蔵の敦煌文献の本草抜抄（P.3822:文書番号）を題材に、敦煌でどのように本草書が読まれ、利用されていたのか、またそれはいつどのような状況で書かれたかについて中国語で発表した。この資料P.3822は紀年も題記もない敦煌文献ではあるが、その特殊な形態や文献学的分析から、僧侶が農業的経営と医療活動をおこなっていた9～10世紀のものと結論づけた。これによって敦煌における本草書という実用書の具体的な使用例をしめすことができた。このことは本草書を本草学という医学的分野に属す書籍という先入観にとらわれていたのでは理解しがたい結論ではあるが、具体的に敦煌文献が寺院の蔵書であった可能性が高いことを考えると妥当である。このように敦煌文献の典籍の読まれ方の推測から唐末

五代の日常生活を読み取ることも可能と考える。

さらに 2010 年 5 月に刊行された「杏雨書屋蔵「敦煌秘笈」概観」には、杏雨書屋蔵史料群の性格について、その目録と刊行済みの図録を手がかりにその見通しを示した。どのようにして杏雨書屋の敦煌文献コレクションが形成されてきたのか、これまでに栄新江や高田時雄、落合俊典等の先行研究にあきらかにされていた成果をふまえて整理し、そこには近代の日中関係、杏雨書屋および武田氏をとりまく関西の人脈が深く関わっていることに言及できた。

また内陸アジア出土古文献研究会(2010 年 6 月）および唐代史研究会（2010 年 8 月）において杏雨書屋所蔵文献の一点である「雑字一本」について研究発表をおこなったほか、同じくその一点である「百恠図（百怪図）」について京都大学人文科学研究所・西陲發現中國中世寫本研究班(6 月）と復旦大学歴史系主催の国際研討会(11 月）にて発表をおこなった。

そしてこれらを翌 2011 年に二種類の論文として公刊した。

先に「雑字一本」(文書番号：羽 41R)という仮題がつけられた、紀年のない資料について述べる（論文名：「敦煌秘笈「雑字一本」考－「雑字」からみた帰義軍期の社会」)。

その表裏面のおよその書写年代を割り出すことにより、課題の主眼であった敦煌文献の「書写者」の姿にせまった

結論から述べれば「雑字一本」は帰義軍節度使の張承奉政権期（894～910）に書写された官吏のための識字手本またはその手本を写したものであり、その背面は具注暦日の下書きとして二次利用されたもので、西暦 965 年と 978 年の暦日の一部である。

この内容分析と観察をふまえ、紙の利用過程を推測していくと、料紙はまず張承奉政権期に官吏になるため敦煌で文字を学んだ者によって一次利用され、その後、960 年代から 970 年代にかけての時期に具注暦日について知識を持つ者によって二次利用された可能性が高い。この一次および二次利用の期間は敦煌の具注暦日の大家として知られた翟奉達の修行時期と活躍の晩年にほぼ重なるものである。ただし、この資料の筆跡は既知の翟奉達のものとは異なるので、彼とほぼ同年代の暦日家またはその弟子が師匠と同世代の者の使用した古紙を利用し、暦日計算の下書きに利用したものと推論を示した。

また別の助成を受けた成果であるがこれに関連する業績として、「『新修本草』序例の研究－敦煌秘笈本の検討を中心に」(『杏雨』第 14 巻、 pp.292～319 、2011 年 6 月）を発表した。ここでは「本草」(文書番号：羽 40R)という仮題のつけられた紀年のない資料を扱い、開元十一年(723)以降に『新修本草』面が書写され、その後、898 年の暦日の下書きとして 2 次利用されていたものという見解を示した。

また以上の 2 点の資料「雑字一本」(文書番号：羽 41R)と「本草」(文書番号：羽 40R)の背面の暦日をあわせて分析し、京都大学人文科学研究所・術数学研究会（2011 年 1 月）にて「敦煌秘笈の具注暦日について」と題して研究発表を行い、科学史研究からのコメントを仰いだ。

次に「占法」(文書番号：羽 44)、かつては「陰陽書」と名付けられていた一点については内容が近いフランス国立図書館蔵本と対比することによって、それが「百恠図」とよぶべきものの一部で、帰義軍節度使のもとで重視されていた典籍のひとつであると結論した（論文名：「敦煌占怪書「百恠図」考」および 2012 年度中に公刊される同名の中国語論文)。

羽 44 に書写された内容はその構成や論理からみて、既知の敦煌文献Ｐ.3106 と同一典籍の異写本の一部の関係にあるほか、Ｐ.4793 とも同類の典籍とみられる。また、Ｐ.2682「白沢精恠図」とも構成や占術の論理に共通点がみられる。Ｐ.3106 の背面には「百恠図」と書写され、それを題名とみなすことができることから、同じ内容、構成からなる羽 44 も「百恠図」であると考えた。

また紀年の明確なＳ.4400「太平興国九年（九八四年）二月廿一日帰義軍節度使曹延祿醮奠文」には陰陽占卜の専家に「百恠書図」を調べさせ、公私における災厄の解決のため、吉日を選び、符を用意して、鎮祭が行われたことが記されており、この典籍の利用方法と利用されていた年代、その目的があきらかとなる。この文書に見られる憂事が「百恠」とむすびつけられていることや符の用い方等は敦煌文献の「百恠図」にみられる手順や論理と合致しているほか、それぞれの分析から、中央の太卜者などに倣って設置されていた帰義軍期の「伎術院」もしくは、州学の「陰陽」科に関わる典籍であったとみられる。

以上のように「羽 44」をはじめとした敦煌文献の「百恠図」は曹氏帰義軍期(914～1002)中頃に 用された「百恠図」の断片と考えられ、いずれの書写年もおそらくはその前後かと推測される。

また、「百恠図」に近似する典籍は日本にも伝わっていたことが確認できるので「百恠図」は敦煌独自の思考・習俗ではなく、基本的な発想は長安―洛陽の中原文化に由来し、それが伝来定着した地域によって独自の受容がなされていったと考えられる。

以上のように、それぞれの資料において敦煌文献の実用典籍を歴史学的に論じるために不可欠である年代比定をおこない、新出文

献の書写年代をおおよそ絞り込むことで、所期の目的をおよそ達成することができた。

この結論はあくまで主に敦煌秘笈というコレクションを中心とした個々の文献の分析によるものであり、そこに敦煌文献の持っている年代幅の広さと関係した人物の多様性を読み取れるとはいえ、それによって敦煌文献全体を貫くなにかがときあかされたとはいえない。ただ、全体像を浮かび上がらせるには、これまで行われてきたように紀年や題記のある文献に頼るのではなく、結局は今回の研究でおこなったような紀年が無い文献の年代比定に地道に取り組んでいくことで道が開けることを確信する。

なお、本研究期間において二度のロシア蔵敦煌文献の調査をおこなっており、その成果はきわめて豊穣なものになると予想できているが、期間中にその成果を公表するにいたれなかった。今後、それらを用いた研究を公表していくと同時に、ここまでの成果の全体を見下ろすことのできる高みにむかって研究を積み重ねていくことにしたい。

また本助成によって海外の学会での発表機会が増えた。今後の国際的な研究連携にむけて一歩を踏み出すことができたことも成果のひとつといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 岩本篤志、敦煌占怪書「百恠圖」考－杏雨書屋敦煌秘笈本とフランス國立圖書館藏本の關係を中心に、敦煌寫本研究年報、査読無　第 5 号、2011 年、pp.65～80
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/NIANBAO_5.pdf

② 岩本篤志、敦煌秘笈「雑字一本」考－「雑字」からみた帰義軍期の社会、唐代史研究、査読無、第 14 巻、2011 年、pp.24～41

③ 岩本篤志、杏雨書屋蔵「敦煌秘笈」概観 －その構成と研究史 －、西北出土文献研究、査読無、第 8 号、2010 年、pp.55～81

④ 岩本篤志、敦煌本「霸史」再考－杏雨書屋蔵・敦煌秘笈『十六国春秋』断片考、資料学研究、査読有、第 7 号、2010 年、pp.27～62

〔学会発表〕（計 7 件）

① 岩本篤志、敦煌における「占雲気書」－杏雨書屋蔵敦煌秘笈 042 考、中國中世寫本研究班、2011 年 6 月 20 日、京都大学人文科学研究所

② 岩本篤志、敦煌秘笈の具注暦日について、術数学研究会、2011 年 1 月 8 日、京都大学人文科学研究所

③ 岩本篤志、敦煌占怪書『百怪図』考（中国語）、中古時代的礼儀、宗教与制度学術研討会、2010 年 11 月 7 日 、復旦大学

④ 岩本篤志、敦煌秘笈「雑字一本」考―雑字から見た敦煌の社会、唐代史研究会（夏期シンポジウム）2010 年 8 月 23 日 、箱根・静雲荘

⑤ 岩本篤志、敦煌秘笈「雑字一本」小考、内陸アジア出土古文献研究会、2010 年 6 月 19 日 、明治大学

⑥ 岩本篤志、敦煌占怪書『百怪図』考、西陲發現中國中世寫本研究班、2010 年 6 月 14 日、京都大学人文科学研究所

⑦ 岩本篤志、貝葉形「本草」考（中国語）、第三届中国中古史青年学者聯誼会、2009 年 8 月 30 日、 武漢大学

〔その他〕
ホームページ等
http://www.asahi-net.or.jp/~yw5a-iwmt/contents/china.htm

６．研究組織

(1)研究代表者
岩本 篤志（IWAMOTO　ATSUSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・助教
研究者番号：80324002